

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(4年計画の1年目)

1. 研究課題

情報と近現代中国

The modern aspects of information in 20th century China

2. 研究代表者氏名

石川 禎浩

ISHIKAWA, Yoshihiro

3. 研究期間

2024年4月-2028年3月(1年目)

4. 研究目的

激動と変化に富んだ近現代中国の歴史を、「情報」という要素をかませることによって、違った相貌にしてみることはできないかというのがこの研究班のねらいである。後世の高みに立つ歴史家が、歴史事件生起の因果関係や結末を知っているのに対し、歴史上の人物は、必ずしも時系列に沿って、あるいは正確な情報ばかりに接しているわけではない。それどころか、情報をそもそも持たずに、あるいは誤解して判断を下したり、行動したりしていることもしばしば見受けられる。それは市井の民であっても、知識人でも、国家指導者でも変わらない。こうした情報の伝達（誤伝を含む）・操作の要素を加味した研究は、決して多くはなく、大きな可能性を秘めている。近現代中国のさまざまな変動、動乱、革命はどのような情報環境のもとで展開したのか、また「情報」を握るものが歴史事件の発生や進行にどのような影響をあたえたのかが問われるであろう。いわば「情報」なる透明要素を仲立ちとして、あの日あの時何があったのかということにこだわる「史実解明」の歴史学アプローチと、情報スクリーンを経たのちの「報道」に焦点をあてる「解釈」としての歴史学アプローチとを有機的に結びつけて中国を見ること、それが本研究の目的である。

The aim of this research seminar is to explore the history of modern and contemporary China from various perspectives by adding the element of "information". While historians of later generations know the cause-and-effect relationships and consequences of historical events, historical figures do not necessarily have access to a chronological sequence of events, nor do they have access to accurate information. Consequently, we often find them making decisions or acting without information in the first place, or misunderstanding the information they do have. This is true whether they are ordinary citizens, intellectuals, or national leaders. Studies that have considered this element of information transmission (including misinformation)

and information manipulation are scarce, but such studies have significant potential. The question that must be asked is under what kind of information environment the various social changes, movements, and revolutions in modern and contemporary China developed, and how those who controlled "information" influenced the occurrence and progress of historical events. The purpose of this study is, so to speak, to look at China through the transparent medium of "information." This perspective will enable us to combine the "historical fact-finding" approach to history, which focuses on what happened on a particular day and place, with the "interpretative" approach to history, which focuses on the "reported facts" after they have passed through the information screen .

5. 本年度の研究実施状況

この研究班の前身にあたる「20 世紀中国史の資料的復元」班の研究成果をとりまとめ、7 月に冊子体（536 頁）として刊行した。収録論文は現代中国研究センターのホームページに掲げたほか、本学図書館機構のレポジトリに登録し、広く電子版にアクセスできるようにした。本研究班自体の重要な活動である研究班「情報と近現代中国」を“発足”させ、4 月から 3 月にかけて、合計 16 回の班例会を開催した。主なものは次の通り（報告者・題目）：4 月 26 日 石川禎浩「情報と近現代中国」を始めるに当たって：佐野学の上海での逮捕（1929 年）と引渡しを試し掘りしてみる」、5 月 17 日 周俊「小躍進への道：毛沢東の情報処理と認知バイアス」、5 月 31 日 殷晴「清末新政期の政治と「輿論」：滬杭甬鉄道借款反対運動を事例に」、6 月 14 日 小野寺史郎「近代南京史をめぐる史料整理と研究の展開について」、7 月 12 日 陸家振「戦時長江中流地区における日中貨幣戦」、7 月 19 日 修士論文構想発表会：B15 李多南「中国共産党の 1936-37 年の「連蔣」方針形成の要因について」、中島大知「錢玄同の言語文字思想と実践」。これら報告はいずれも歴史学のディシプリンに立つものではあったが、情報という素材を扱う際の注意点に意を用い、史学と情報学の協業による新たなパラダイムの創出にかんし、多くの知見が得られた。

6. 本年度の研究実施内容

- 2024.4.26 情報と近現代中国 「情報と近現代中国」を始めるに当たって：佐野学の上海での逮捕（1929 年）と引渡しを試し掘りしてみる 発表者 石川禎浩 コメンテーター 福家崇洋
- 2024.5.17 情報と近現代中国 小躍進への道：毛沢東の情報処理と認知バイアス 発表者 周俊 同志社大学グローバルスタディーズ研究科 コメンテーター 谷川真一 神戸大学国際文化学部
- 2024.5.31 情報と近現代中国 清末新政期の政治と「輿論」：滬杭甬鉄道借款反対運動を事例に 発表者 殷晴 同志社大学グローバルスタディーズ研究科 コメンテーター 箱田恵子 文学研究科

- 2024.6.14 情報と近現代中国 近代南京史をめぐる史料整理と研究の展開について 発表者 小野寺史郎 人間・環境学研究科 コメンテーター 瞿艷丹
- 2024.7.12 情報と近現代中国 戦時長江中流地区における日中貨幣戦 発表者 陸家振 コメンテーター 岡崎清宜 愛知学院大学文学部
- 2024.7.19 情報と近現代中国 中国共産党の1936-37年の「連蔣」方針形成の要因について 発表者 李多南 人間・環境学研究科 コメンテーター 楊奎松 錢玄同の言語文字思想と実践 発表者 中島大知 文学研究科 コメンテーター 平田昌司 京都大学名誉教授
- 2024.9.27 情報と近現代中国 中共語境下“無産階級”概念的變動問題——兼談毛主義与馬克思主義、列寧主義的關係 発表者 楊奎松 コメンテーター 鄭成 兵庫県立大学
- 2024.10.11 情報と近現代中国 清末における過渡期的な歴史叙述と出版広告——『中東戦紀本末』を中心に 発表者 森岡優紀 国際日本文化研究所 コメンテーター 森川裕貫 関西学院大学
- 2024.10.25 情報と近現代中国 中国共産党結党前後の「人民」概念について 発表者 和田英男 近畿大学 コメンテーター 張子豪 長崎大学教育学部
- 2024.11.8 情報と近現代中国 「二つの中国」におけるギャラップ：権威主義下の世論調査について 発表者 比護遥 学振特別研究員 コメンテーター 家永真幸 東京女子大学国際教養学部
- 2024.11.22 情報と近現代中国 満洲事変直前の中国東北における中国人社会と満蒙鉄道問題 発表者 金子豊 文学研究科
- 2024.12.6 情報と近現代中国 曹禺『雷雨』の近代性(modernity)再論—王德威『抑圧されたモダニティ』と関連して 発表者 瀬戸宏 摂南大学名誉教授
- 2025.1.17 情報と近現代中国 被建構の「民族固有道德」:「礼義廉恥」的前世今生 発表者 楊瑞松
- 2025.1.31. 情報と近現代中国 莫斯科派的幻影:中国共产党留苏群体的分分合合 発表者 張藍天
- 2025.2.14 情報と近現代中国 1960年代前半の日中共产党關係の新展開:日本共产党新聞従業者の上海訪問を中心に 発表者 Lam. On I ケンブリッジ大学アジア学部
- 2025.2.28 情報と近現代中国 沈從文『辺城』再読——フォークロア・地域社会・内面と自我という三側面から 発表者 津守陽 人間・環境学研究科

7. 共同研究会に関連した公表実績

研究班の成果発表という性質を持つものとして、『20世紀中国史の資料的復元』（石川禎浩編著、京都大学人文科学研究所、2024年7月、viii+536頁）を300部印刷し、他方で若手班員の単著の刊行が相次いだことをうけ、「知識と情報の中国政治史」合評会を開催した（日時：2024年9月13日）

8. 研究班員

所内

石川禎浩、瞿艷丹、陸家興、福家崇洋、村上衛、楊奎松、吳孟晋

学内

塩出浩之(文学研究科)、箱田恵子(文学研究科)、小野寺史郎(人間・環境学研究科)、貴志俊彦(東南アジア地域研究研究所)、羅亜妮(文学研究科)、津守陽(人間・環境学研究科)、程天徳(人間・環境学研究科)、関藝蕾(文学研究科)、孟奇(文学研究科)、金子豊(文学研究科)

学外

秋田朝美(大阪大学人文学研究科)、岡野（葉）翔太(神戸大学人文学研究科)、漆麟(鳥取大学)、中村元哉(東京大学教養学部)、丸田孝志(広島大学総合科学研究科)、水羽信男(広島大学総合科学研究科)、林礼釗(大阪大学人間科学研究科)、アルス(大阪大学人文学研究科)、鄭成(兵庫県立大学環境人間学研究科)、菊池一隆(愛知学院大学文学部)、島田美和(慶応義塾大学法学部)、周俊(同志社大学グローバルスタディーズ研究科)、殷晴(同志社大学グローバルスタディーズ研究科)、瀬戸宏(摂南大学外国語学部)、瀬辺啓子(佛教大学文学部)、郭夢垚(神奈川大学外国語学研究科)、土肥歩(青山学院大学)、温秋穎(大谷大学国際文化学科)、森川裕貫(関西学院大学文学部)、山崎岳(奈良大学文学部)、楊韜(佛教大学文学部)、和田英男(近畿大学)、小堀慎悟(名古屋外国語大学)、徐璐(近畿大学国際学部国際学科)、団陽子(日本学術振興会)、比護遥(日本学術振興会)、都留俊太郎(台湾中央研究院台湾史研究所)、丁麗瓊(天津大学)、谷雪妮(北京師範大学)、鄒燦(中国南開大歴史学院)、姜珍亞(漢陽大学校)、姜珍亞(漢陽大学校)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

[illegible]

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	4		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	12		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0	(0)	0	(0)
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	

上記の数字(合計 17)は、共同利用・共同研究による成果と明記して刊行された論文集『20 世紀中国史の資料的復元』に収録された論文数である。その一覧はタブ 8 のデータ参照。

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

	雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月	論文名	発表者名
1	中国――社会と文化	1	2024.7	毛沢東――革命のカリスマと詩の力	石川禎浩
2	20 世紀中国史の資料的復元	17	2024.7	「若干の歴史問題に関する決議」の資料的復元へ向けて：毛沢東の講話「党のボリシェヴィキ化 12 カ条について (1942 年)」解析；模範栄誉軍人張樹義の伝記の成立と変容；農業集団化の百科事典――『中国農村的社会主義高潮』の編纂・発行・評価；現代中国政治の転換と農村幹部：河北省 X 県の事例；南京国民政府期の技術と国家；戦前日本の中国語学習誌の資料的復元；中華人民共和国初期における肺結核医学資料の編	石川禎浩；丸田孝志；周俊；田中仁；島田美和；森川裕貫；温秋穎；瞿艷丹；村上衛；小野寺史郎；高嶋航；貴志俊彦；呉孟晋；

			纂と出版；18 世紀中国経済の図版数量的復元——「大分岐」と大豆；戦後日本の中国近現代思想研究の歴史に関する資料的考察；『大連市志・体育志』の編纂；1940 年代の「映像力」；昭和二年の溥儒の来日について；ラテン化新文字運動の始動——倪海曙の編年史叙述の検討とエスペラント要因；中国のリベラリズムと地政学：何永佶を中心として；曹禺『雷雨』序幕・尾声の劇中意義；日中未国交期における「新中国」の歌の受容とその広がり（1949-1972）	都留俊太郎；水羽信男；瀬戸宏；岡野翔太
--	--	--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	中国共産党、その百年（韓国語版）	石川禎浩	2024.4	ソウル：TOBE books	
2	中国共産党の神経系	周俊	2024.5	名古屋大学出版会	
3	20 世紀中国史の資料的復元	石川禎浩	2024.7	京都大学人文科学研究所	
4	<i>The Sinosphere and Beyond: Essays in Honor of Joshua Fogel</i>	<u>JUDGE, Joan</u> et al. (<u>ISHIKAWA, Yoshihiro</u>)	2024.7	DeGruyter	○
5	革命と親密性 毛沢東時代の「日常政治」	<u>鄭浩瀾</u> 編（丸田孝志）	2024.11	東方書店	
6	アジア遊学 299 近代日本の中国学——その光と影	<u>朱琳</u> 、 <u>渡辺健哉</u> 編（小野寺史郎）	2024.11	勉誠出版	
7	近現代中国の制度とモデル	村上衛・ <u>田口宏二郎</u> ・ <u>木越義則</u>	2025.1	京都大学人文科学研究所	
8	流動する中国社会——疎外と連帯	<u>鄭浩瀾</u> 編（谷川真一）	2025.3	慶應義塾大学出版会	

12. 博士学位を取得した学生の数

4（学内 2・学外 2）

13. 次年度の研究実施計画

旧班「20 世紀中国史の資料的復元」の終了をうけ、新たに発足した本研究班には、旧班以来の多くの班員が残留し、ために高水準の研究活動をその当初より行うことが可能であることがわかった。一方で、研究班のあり方についての共通認識が班員全体に浸透しているかを問われるならば、なお課題は多いと言わざるを得ない。みずからの研究を披露するのに意をむけ過ぎたため、常識を越える枚数のレジュメが作成、提出されたこともあった。次年度は、研究班の本来のあり方に立ちもどり、研究班の目的の明確化——ある特定のテーマ（今回は「情報と近現代中国」）に沿って、専門分野を異にする研究者が共同で研究を深め、新たな知見を得ること——を目指すと共に、若手・大学院生が中心となった研究班メンバーがどのようにすればより良い協業関係を築けるのかを模索していくつもりである。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究班が始まって 1 年の段階では成果の公表といった段階はまだまだ先のことはあるが、相変わらず中国本土での関連資料の発掘や調査は厳しく抑制されている。それゆえ、中国以外の地域でも資料の発掘を独自にせねばならないだろう。